

## 謝 辞

本論文を仕上げるに際し、これまで長きにわたって支え導いて下さった多くの皆様方に心から感謝と御礼を申し上げます。

まだまだ不十分ではありますが、今持ちうる能力の限りを尽くした論文を、重さ 7 グラムほどの USB メモリーに入れ終わったところで、この時まで残しておいた本論文最後の執筆をしています。

2000(平成12)年4月に編入学の許可を頂いてからここにいたるまで、10年の歳月が過ぎました。この間、職場は5か所を渡り歩きました。10年という歳月は、自分の感覚では一瞬の時間としか感じていないのですが、職場の同僚や周りの方々との出会いを思い浮かべると、その長さや重さを感じざるを得ません。

私の高齢者と接する際の原点は、「仙人じいさん」です。山奥に一人暮らしをしている高齢者のことが心配で、保健福祉課の職員が息を切らしながら居宅を訪問するのですが、「用事はない」と簡単に追い払われてしまう。それでも、さまざまな関係機関と連携しながら備えを怠らず、何度、追い払われても顔を出しに山を登っていく。そんなことを繰り返している中で、次第にお宅に上がらせて頂ける機会が増え、お話しをしたり簡単な健康チェックをさせてもらえるようになっていった。その後、デイサービスにも遊びに来るようになり、他者との関わりも多少は持つようになってきた。断られてもめげずに山登りをして家庭訪問していた方は、山河一葉さんといい、この方の口癖は「心が動けば身体も動く」でした。本論文でも触れている他者との関わりや社会的相互行為に関心を持つようになったのは、「仙人じいさん」と関わり合う姿に大きな影響を受けたからです。

1999(平成11)年4月に長寿社会政策課の在籍するようになった時期は、措置制度から介護保険制度への移行を目前に控え、高齢者福祉に関する議会質問が山のように出され、希望と不安が錯綜する毎日でした。そんな中で関わったのが富谷町と特別養護老人ホーム創設の準備を進めている介護職員でした。論文を意識して関わったわけではなく、「自分の親が利用するようになって後ろ髪を引かれない施設をつりたい」という富谷町や介護職員の願いに関わることが、結果として貴重な研究の場を与えて頂くことになりました。富谷町及び社会福祉法人永楽会の皆様には、貴重な時間を提供して頂きました。この両者の付き合いは大学院在籍と全く一致します。その意味では、富谷町、富谷町民生児童委員、町下町内会そして社会福祉法人永楽会の皆様方との出会い無くして、この日は無かったと思っています。ありがとうございました。

1年ほどの時間差で関わったのが鶯沢町(現栗原市鶯沢)です。関わりの始まりは、鶯沢町に高齢者福祉施設を誘致したいということからでした。さらに町村合併を目前にして、過疎化と高齢化が同時に進む鶯沢町の将来を真剣に考えていた時期でした。鶯沢町の悲願に応えるべく関わっている中で、鶯沢町役場の方はもちろんですが、地元自治会の皆さんや小中高校の先生方とも関わるようになり、うぐいすの里を中心にしてその輪が広がっていきました。そんな関わりの中から、さまざま

まな実践が試みられるようになり、いつしかそれは大きな研究テーマになっていきました。鶯沢町の皆さんは、いつも温かく迎入れてくれます。とても有り難いことです。鶯沢町は、地域福祉を学ぶに際して貴重な時間を与えてくださいました。うぐいすの里、鶯沢診療所、鶯沢小学校、鶯沢中学校、鶯沢工業業高等学校、そして地区自治会や民生児童委員のみなさん、鶯沢役場のみなさん、ありがとうございました。

これまで高齢者福祉の分野を主に仕事をしてきた私にとって、共生型グループホームの創設に関わったことは、障害者福祉や地域で暮らすことの意味を学ぶ貴重な機会でした。「私と心中するつもりで仕事に関わってもらいたい」と並々ならない覚悟を持ってモデル事業を引き受けて下さった社会福祉法人白石陽光園。職員の皆さんの振る舞いに「ひたむき」という言葉の持つ奥深さを学びました。明るく振る舞うには、ぶれない人間観を持つことの大切さを知りました。ながさかのみなさん、とものみなさん、社会福祉法人白石陽光園の皆さん、ありがとうございました。

学問とはほど遠く、ひたすら想いだけで現場と関わっている私を今日まで導いて下さった社会学研究室の先生方には感謝の気持ちを表す言葉ばかりが見つかりません。さまざまな機会に、ものを書く機会を与えて下さったり、共同研究という場をつくって頂いたり、研究室に足を運ぶことの少ない私には貴重な学びの機会でした。学会でたまたま顔を合わせた時に、論文は一瀉千里(いっしやせんり)に、勢いを付けて書くものだを教えて頂いたりもしました。気に掛けていただいていることに、大きな励ましと頑張り続けることの勇気を持つことが出来ました。ありがとうございました。社会学研究室の歴代の助教の皆さんには、指導教官とはまた異なる細かな内容にわたる助言をいただき、論文の作法に疎い私には心強い相談相手で大変助かりました。助教のみなさん、たまにしか研究室に立ち寄らない私にさまざまな連絡や書類を送ってくださいました石上さん、ありがとうございました。

最後になりましたが、家族にもお礼します。給料が上がる訳でもない、地位が上がらなくてもない大学院で学ぶ時間をつくってくれたことに、ただただ感謝しています。平日は仕事、休日は何処かわからない施設に行く夫(父)は、自宅に居場所がなくなっても仕方がないだろうと思います。しかし、私の唯一の楽しみである学ぶことに長い間付き合ってくれました。今後も、このような過ごし方は改まりそうにないのですが、出来ればこれまで同様に付き合ってもらえることを願っています。ありがとうございました。そしてこれからも宜しく願います。